ディア　マイマスター

キリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ディア　マイマスター

【Ｎコード】
Ｎ０６７０Ｕ

【作者名】
キリ

【あらすじ】
ある日突然両親から明かされた重大な秘密。それは、実は両親が人間ではなく、魔女であった祖母の使い魔であるということだった。祖母が亡くなり、このままでは地上への滞在期間が一週間とのこと。それを過ぎれば強制送還となるらしく、そうならないためには、別の魔女と契約を結ばなければならないという話であった。
祖母の知り合いの魔女と契約を結ぶべく、祐莉はその魔女の元へと訪れるも……。

プロローグ

幼い頃、お伽話の魔女が怖かった。
トンガリ帽子に大きな鷲鼻。
人を惑わし、心を操る――そんな悪い魔女が怖かった。
『でもね、魔女の全てがそんなに悪いというわけではないんだよ？』
そう言ったお祖母ちゃんは、柔和な笑みを浮かべる。
『本当？』
『本当さね。お祖母ちゃんを見てごらん。お祖母ちゃんが怖い魔女に見えるかい？』
『お祖母ちゃんは、魔女なの？』
お祖母ちゃんは答えるかわりに、何も持っていない右手を握り、それからゆっくりと開いてみせた。
掌の上には、オレンジ色のキャンディが一粒。
それは、確かに魔法のようであった。
『すごい、すごーい！』
今考えれば、お祖母ちゃんの手品だったのだろう。それでも、お祖母ちゃんのように善い魔女もいるのだと安心したし、この日から魔女に怯えることはなくなった。
『祐莉（ゆうり）、お前もいつか――』

「……いつか」
――何て言ってたんだっけ？
お祖母ちゃんの葬儀の際に、白河祐莉は、そんな事を思い出していた。

ファミリア・ファミリー?

1

お祖母ちゃんが亡くなってから三日後。

祐莉は、高校の制服に袖を通していた。別に制服で学校を選んだわけではないので、これといって特徴のない極一般的な上下セパレート型のセーラー服である。

（それにしても……）

もう少しかわいいデザインの制服でもよかったんじゃないかと、入学してから半年ほど経った今では思う。

高校ではスカートの上部を折り返して「ミニ」にしている娘もいるが、正直足の長さにも美しさにも自信はないので、これは却下だ。

（まっ、他の部分に自信があるかってーと、ないんだけどね）

そうして着替えを済まし、二階から一階へと下りる。洗面所の鏡で身支度をざっと整えると、祐莉はダイニングキッチンへと向かった。

「お父さん、お母さん、おはよー」

「ああ、おはよう」

キッチンでは、お母さんがサラダや目玉焼きなどの朝食を用意し、お父さんが椅子に座って朝刊に目を通している。

祐莉が父親の前に座ると、ちょうどチンと音を立ててトースターからこんがりとキツネ色に焼けたトーストが二枚、飛び出してきた。トーストを自分とお父さんの前におかれた白いお皿の上にのせ、両手をあわせて「いただきます」と言ってから、まずはサラダへとフォークを突き刺す。

自家製のドレッシングは少し酸味が効いており、ますます食欲が増した。

「あのな、祐莉ちゃん。あの……」
「……？」
トーストにカリカリになるまで焼かれたベーコンと半熟の目玉焼きをのせ、美味しそうにかじりつく祐莉に、お父さんは何か言いたげな様子で彼女の顔をみる。
「何？　どうしたの？」
「その、な。祐莉ちゃんに、話があるんだが……」
「話……」
何か怒られるようなことでもしたのだろうか。それにしては、お父さんの目は泳ぎ、何だかはっきりとしない様子で、新聞と彼女を交互に見つめている。
「何なの？　私、何か怒られるようなことでもしたっけ？」
全くもって身に覚えがない。
小首を傾げる祐莉に、
「いや、そうじゃないんだ。そうじゃ……。祐莉ちゃんが悪いと言うのではなく、どちらかと言えば父さんたちの方が……」
本当に、何なのだろう？
こんなに煮え切らないお父さんを見るのは初めてだった。
「お父さん」
お母さんがコップにつがれた牛乳を差し出しながら、困ったようにリビングの時計を見る。
つられて時計を見ると、時刻は七時四十分。
そろそろ学校に行かなくては、間に合わなくなる時間であった。
「……うん。ああ、いや、帰ってから話そうか。早く食べてしまいなさい。学校に遅れるぞ？」
そう言って乾いたように笑うお父さんを見て、祐莉は眉根を寄せるのだった。

＊

「それはきっとあれね、リストラよ！」
今朝のことを相談するなり、麻子は眼鏡のブリッジを押し上げてそう言った。
「リ、リストラぁ～！？」
祐莉は、思わず大きな声で叫んでしまう。
幸いなことに今は昼休みで、お弁当を食べるため他に人気のない体育館裏へとやってきていたため、その叫びに気づくものはいなかった。
「まず間違いないわ。挙動不審な父親に、気を使う母親。きっと会社が倒産して、それを打ち明けるかどうか迷っているのよ！」
「あれ？　でも、祐莉のお父さんって公務員だったよね。リストラはないんじゃない？」
力説する麻子の隣りで、パンを食べていた晴香がツッコミを入れた。
「えっ、そうなの？」
「うん、まあ」
沈黙が三人の間におりる。
それからしばらく黙ってお弁当を突っついていると、突然麻子が立ち上がって言った。
「そうよ、わかったわ。脱サラよ！　脱サラして、何かお店を始めようとしているの！」
麻子はひとり納得したようにうなずく。
「脱サラって、久しぶりに聞いたわね、その言葉」
晴香のそんな呟きをよそに、祐莉は考え込んでいた。
（お店、お店かぁ……）
趣味の骨董品集めが乗じて、骨董品店とか。最近はお母さんと二人、ガーデニングにハマっていたから、お花屋さんもあるかもしれない。はたまた、お父さんが料理をするところは見たことはないけれど、案外あれでものすごく料理が上手で、小料理店とかどうだろう。

「うーん、あるかも……」
「間違いないわね」
麻子は座って、デザートの入ったタッパーを開けた。
「まあ、帰ってから話すって言ってるんだし、もしかしたら大した話じゃないかもよ？」
麻子のタッパーから半分にカットされたイチゴをつまみ、口へと放り込みながら晴香が言う。
「うん、まあそうなんだけどね」
そう言って、お弁当箱を片付けていた時だった。
誰か人のやってくる気配がする。
ちょうど体育館が影になって、ここからは見えない位置。なんとなく気になってひょっこり覗き込むと、そこには男女一組のペアがいた。
「これはもしかして」
「もしかするかも」
内心ドキドキしながら、祐莉たちはそれを見守る。
「……好きです、付き合ってくださいっ！」
告白したのは、女の子の方だった。
「やっぱり！　あれって二組の河野さんよね。相手の男の子って誰？」
艶やかな黒髪。すらりとした長身に、整った顔立ち。
（なるほど。一般的な制服も、ああいう人間が着れば違って見えるわけか）
祐莉はひとり納得する。
それにしても、あんなにカッコイイ男の子、この学校にいたっけ？
「そっか。祐莉は忌引きで知らないんだっけ。ちょうど三日前に転校してきた男の子で、名前は黒峰久也（くろみねひさや）。帰国子女で、何でも転入試験で満点をとった天才らしいよ」
麻子が説明してくれる。この都立成城高校は、県下に名だたる進学校だ。もちろん転入試験も相当レベルが高いものとなっている。

そこで満点を取るとなると、どれだけ賢いのだろう。
顔が良くって頭も良い。
（そりゃあ、モテるはずだ）
そんな黒峰くんは、告白した河野さんに対し、
「君は、自分が僕と釣り合っているとでも？」
そう言って鼻で笑った。
「――なっ！？」
あんなのってありなわけ？
河野さんは顔を真っ赤にしながら、来た道を走っていく。
「あちゃー、噂は本当だったか」
「噂って？」
麻子の言葉に、祐莉が反応する。
「転校してからこっち、すでに五人以上がフラれたって話。しかもどの娘もこっぴどいフラレ方をしたってね」
麻子と晴香は覗くのをやめ、食事の後片付けをはじめる。
（アイツ、一体何様のつもり！？）
そう思い黒峰をにらんでいると、彼はこちらを振り返り、ニヤリと笑みを浮かべてみせた。
「……っ！」
思わず顔をひっこめ、体育館の影へと隠れる。
（私たちがいることに気づいていたの？）
恐る恐るもう一度顔を出すと、そこに彼の姿はなかった。

ファミリア・ファミリー？（後書き）

食べてばっかw

2

「さっき、見てたろう?」
放課後、掃除当番として教室のゴミ捨てのため外を歩いていたところで、祐莉はそう声をかけられた。
「なっ、え? あっ――」
「昼休みだよ。覗いてただろう?」
驚くのも無理はない。なにせ、窓越しに廊下から声をかけてきたのはハッとするような美少年で、けれど先の告白を見る限り、相当に性格が悪いと思われる男の子。
(おまけにあの口ぶりからだと、ナルシストで他人の心を労ることのできない冷血漢)
驚きから一転、さきほどのことを思い出し、そんなことを考えていると、
「なーんか、失礼なこと考えていない、アンタ?」
転校三日目にして噂になっている少年、黒峰久也は祐莉を冷ややかににらむ。
「失礼なのはアンタの方でしょ? せっかく女の子が勇気を出して告白したっていうのに、あれはないんじゃない?」
「やっぱり見てたんだ」
そう言って馬鹿にしたように笑う。
「いやらしい」
「なっ……!」
祐莉の顔が真っ赤になる。売り言葉に買い言葉とはいえ、思わず墓穴を掘ってしまった。
とはいえ、『いやらしい』はないんじゃない? 『いやらしい』は。

「べ、別に覗きたくて覗いたわけじゃ……！」
「ふーん」
そう言って彼は窓の縁に肘をのせ、頬杖をついた。
「それよりもっ！　告白よ告白。アンタ、一体何様のつもりよ！」
「何様って？　僕はただ、彼女に質問しただけなんだけど？」
――君は、自分が僕と釣り合っているとでも？
それって、質問といえるか？
「ちょっと顔が良くって頭が良いからって、ああいう質問すること自体、性格が悪い証拠よ」
「ああ、それはよく言われる」
言われるのかいっ！
祐莉は思わず叫びそうになる。
「でも、自分に自信があるってそんなに悪いことなのかな。どうも日本人は自分に自信を持つことをよしとしない人間が多いけど」
そういえば、と祐莉は麻子の言葉を思い出す。
（コイツって、帰国子女なんだっけ）
だったら、昼の告白のことも、決して悪気があってのことではないのかもしれない。
でも。
「まあ、僕に釣り合うような女の子なんて、そうそういるわけがないんだけどね」
「……」
やっぱり、そんなことはなかったわけで。
それにしても。
「そんなこと言うために呼び止めたわけ？　よほど暇なのね」
初めて会ったはずなのに、何でこんな憎まれ口を叩いているんだか。自分でも自分がよくわからなかった。
「僕は暇だけど、アンタは暇なの？」
黒峰久也は、祐莉の持つゴミ袋を指さし、底意地が悪そうに笑った。

（しまった〜！）
すっかり話こんでしまったけれど、今はまだゴミ捨ての途中であった。
ふと周りを見れば、下校する生徒たちの姿が。
「あー、もうっ！」
祐莉は慌ててゴミ置き場へと向かって走りだす。そんな彼女の耳に、小さいけれどその声は確かに届いた。
「またね、白河祐莉」
祐莉の足が止まる。
（あれ？　私、アイツに名前を教えたっけ？）
振り返るとそこにはもう、彼の姿はなかった。
昼休みの時と同じように、それはまるで魔法のようであった。

＊

「それで、待ち合わせに遅れたってわけ？」
「――はい」
すでに校門で待っていた麻子と晴香に頭を下げ、祐莉は二人と共に歩き出す。
高崎麻子（たかさきあさこ）と宮路晴香（みやじはるか）。二人とも小学校からの幼なじみであり、親友である。晴香とは同じクラスであるが、麻子とはクラスが離れているため、こうして一緒に帰るときは校門で待ち合わせをすることが多かった。
そうして、帰る途中で話題になったのは、やはりというか黒峰久也のことであった。
「わかったわ。アイツ、祐莉のことが好きなのよ！」
「今日初めて会ったのに？」
「ひと目惚れってヤツよ。体育館で目と目が会った瞬間、こうビビビッと電流が」
「アンタって、古臭い表現好きよね」

麻子の言葉に、晴香が苦笑する。
「でもまあ、祐莉の名前を知っていたわけよね。麻子、アンタ彼と教室で話をしたりしてないの？」
そう。黒峰久也は、麻子のクラスメートなのだった。
「ないない。クラスの女子は騒いでいたけど、私は別に興味もなかったしね」
「麻子以外にあのクラスで祐莉との接点なんて……」
晴香が言ったときだった。
「そうよ、きっとあれね。二人は幼い頃、再会の約束をしていたのよ！」
麻子がグッと拳を握り締める。
「それだったら、祐莉の名前を知っていてもおかしくないでしょ？」
「えーっと、それって私と黒峰久也のこと？」
「そう。ほら、小さい頃家が近所で仲が良くって、再開したときに結婚しようとかって約束を……」
「どこの漫画よ、それ」
晴香が軽く腕を振って、麻子にツッコミを入れた。
「大体、小学校から一緒なんだから、それなら私たちだって彼のことを知ってるはずでしょ」
「いや、だからさー、まだ小学校に入る前の話よ」
「そんな小さい頃に男の子と約束なんてしたことは……」
そう言いかけたとき、ふと脳裏に誰かの顔が浮かぶ。
『約束だからね』
……した。なぜ今それを思い出したのかはわからないけど、確かに小さい頃、祐莉は誰かと約束をしていた。
ただし、約束をしたその子は――。
「ほら、やっぱりあったのね！」
麻子が眼鏡を光らせ、ズズイッと迫ってくる。
「いいえ、残念だけど。確かに小さい頃、何かしら約束をした覚えはあるけど、相手は女の子だったし」

そう。相手は女の子。お祖母ちゃんの家に遊びに行ったとき、よく一緒に遊んだ女の子がいた。色白で黒髪の、まるで人形のような女の子。その子は小学校へと上がる前に遠くへと引っ越し、その別れの際に私たちはひとつの約束をした。

でも。

「その約束が何だったか、思い出せないんだよねー」

祐莉は「うーん」と唸りながら、首をひねる。

（お祖母ちゃんの言葉といい、その子との約束といい、私ってば忘れっぽいのかなー）

そしてこのとき、祐莉はもうひとつ忘れていたことがある。

家に帰ったら話があるという、お父さんの言葉を。

ファミリア・ファミリー？（後書き）

なかなか書きたいところまで進まない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0670u/

ディア　マイマスター

2011年6月26日17時10分発行